うるおい

人はだれでもである。ましてや柔らかい子供の心を友とする我等にとりては、絶えず心のうるおいがなくてはならぬ。かわいた、かれた、かさかさした心は子供の相手となるに適当のものではない。しかも我等の心は、またしてもこのうるおいが失せやすい。事務に忙しいものは、ついつい機械のような心になって、摩りへらされた革の様に粗れて来る。研究々々と余りにその方に熱するものは、日盛りの街を駈けあるく犬の咽のようにいらいらしい心になりやすい。まして、我欲にあせるものの焦げた心は、決して子供のよき友でない。

（倉橋惣三選集第二巻　幼稚園雑草より）